

## 8. 大豆

### (1) ナガハジロ (札育3号)

来歴 「ナガハジロ」は、北海道農業試験場で高脂肪多収品種育成のため、1950年(昭25)に「十勝長葉」を母とし、「黄宝珠」を父として交配を行い、子実比重による選抜効果の検討に用いた材料の中から選抜固定をはかったもので、1961年(昭36)に優良品種に決定し、農林省に新品種「ナガハジロ」(大豆農林21号)と命名、登録された。

- 特性概要 1. 胚軸色は紫、小葉の形は長葉で花色は赤紫、毛茸は白色、熟莢は淡褐色を呈する。  
 2. 草型は「十勝長葉」に似た有限伸育型であるが、莖長は「十勝長葉」よりやや高い。  
 3. 開花期は「大谷地2号」、「北見白」とほぼ同じ、成熟期は「北見白」より遅く、「十勝長葉」より7日前後早い晩生の早に属する。  
 4. 着莢は密で、一莢内の胚珠数は比較的多く、胚珠の稔実は良好である。  
 5. 粒色は黄白、臍色は黄で粒形が豊満であり、1,000粒重は「十勝長葉」より僅かに大きい。  
 6. 脂肪含量は「大谷地2号」よりも1.5~2.0%高く、蛋白含量は同程度である。  
 7. 収量は北海道中央部以南においては「十勝長葉」「丸小粒」に比べて一般に高く、安定している。

栽培適地と奨励態度 本道中央部以南(石狩、後志、日高、胆振、檜山、渡島)に適し、これらの地帯に栽培されている「丸小粒」に換えて奨励する。〔1966年(昭41)廃止〕

試験場所	開花期	成熟期	生育日数	成熟期における				10a当り		1,000粒重	試験年次
				主莖長 cm	主莖節数 節	分枝数 本	着莢数 莢	全重 kg	子実重 kg		
北海道農試	7.22	10.3	145	56.8	—	9.2	79.5	448	242	193	1957~1960
渡島支場	7.17	9.25	140	55.7	15.4	6.3	74.7	429	249	204	"
十勝支場	7.26	10.10	143	83.0	16.1	6.4	67.7	461	223	205	"
北見支場	8.2	達せず	—	82.2	17.0	6.2	71.3	477	187	190	"
天北支場	7.30	(10.12)	(148)	57.0	—	6.5	62.2	380	169	192	"
原原種農場	7.17	10.6	143	64.1	—	2.9	33.5	—	238	193	1959~1960

### (2) シンセイ (十育92号)

来歴 「シンセイ」は1950年(昭25)、北海道立農業試験場十勝支場において、早熟、多収品種の育成を目標として、晩生、強莖、多収の「十勝長葉」を母とし、極早生の「上春別在来」<sup>田</sup>を父として人工交配を行い、以来系統育種法により選抜固定を図ったものである。1956年(昭31)より生産力検定試験を行い、1958年(昭33)より系統適応性検定試験に供試した結果、早・中生種地帯にとくに適し、収量も多かったため、1961年(昭36)優良品種に決定し、農林省に新品種「シンセイ」(大豆農林22号)と命名、登録された。

注) 北海道立農業試験場根室支場で1949年(昭24)に早生の耐冷性在来種を収集した際、古くから自給用に栽培されていた在来種として野付郡別海村字上春別から取り寄せられたもの

で、「霜不知」か「奥原大豆」から選抜されたとも伝えられる。

- 特性概要**
1. 主茎長は「鈴成」より長く、「北見白」並み、分枝数は「鈴成」、「北見白」より多く、草姿は「霜不知1号」に類似しやや軟弱で開張する。
  2. 胚軸色は紫、葉は円葉、花色は赤紫、毛茸は褐色、熟莢は褐色を呈する。着莢は「鈴成」に比しやや疎である。
  3. 子実は球形で、種皮色は黄白、臍は暗褐色、子実の大きさは1,000粒重250g内外で中粒種に属する。
  4. 熟期は中生の早に属し、開花期は「鈴成」、「北見白」と等しいが、成熟期は「鈴成」より2～3日、「北見白」より5日程早い。
  5. 耐倒伏性は「カリカチ」にまさり弾力性に富むので普通栽培条件で倒伏することはない。
  6. 子実収量は全道的にみて「鈴成」より多く、「北見白」に遜色がない。
  7. 子実の粗蛋白含量は「鈴成」、「北見白」よりやや低く、粗脂肪含量は「北見白」より高い。
  8. マメシンクイガの被害は「鈴成」、「北見白」並みである。

**栽培適地と奨励態度** 「シンセイ」は、十勝管内山麓、網走管内北部、上川管内北部、など・中生種地帯に適し、「鈴成」に比し品質面ですぐれているので、積極的に「鈴成」におきかえて栽培すべきである。

耕種法は「鈴成」、「北見白」に準じてよく、疎植に過ぎると多収は望めない。

[1971(昭46)廃止]、シンセイは1966年(昭41)廃止の決定をみたが、1968年(昭43)北海道農業試験会議で耐冷性強の特性から見て廃止を見おくる事としたが、1971年(昭46)北海道農作物奨励品種登録の際廃止された。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における				10a当り		1,000粒重	試験年次
				主茎長	主茎節数	分枝数	着莢数	全重	子実重		
十勝支場	7.23	9.25	128	71.9	14.2	6.8	68.2	452	196	235	1957～1960
北海道農試	7.18	9.17	129	44.1	12.8	7.0	61.6	328	172	240	1958～1960
天北支場	7.27	10.3	135	54.1	—	5.4	53.6	429	199	247	"
北見支場	7.29	9.29	132	67.9	12.5	7.7	74.6	425	222	222	"
上川支場	7.26	9.28	124	86.6	—	7.7	—	592	265	274	1959～1960
原原種農場	7.18	9.19	127	53.0	—	3.5	33.0	—	263	226	1958～1960
根室支場	8.10	—	—	—	—	6.4	—	329	177	216	1959～1960

### (3) コガネジロ (十育95号)

**来歴** 「コガネジロ」は、1952年(昭27)北海道立農業試験場十勝支場において、高脂肪、多収、白目品種の育成を目標として、中国産品種「紫花4号」を母とし、強茎、長葉、多収の「十勝長葉」を父として人工交配を行った。以後選抜固定を図り、1957年(昭32)より生産力検定予備試験を行い、1958年(昭33)から「十育95号」の系統名で生産力検定試験、系統適応性検定試験、栽培特性検定試験に供試した。翌年から原種決定試験に供試し、地方適否を検定した結果、消費者の需要動向が白目(臍色が黄～極淡褐)品種へ変わりつつあることから、白目良質の

多収品種と認められ、1961年(昭36)に優良品質に決定し、農林省に新品種「コガネジロ」(大豆農林23号)と命名、登録された。

- 特性概要**
1. 主茎長は長茎の「十勝長葉」に比しさらに高く、半無限伸育型を示す。分枝数は「十勝長葉」と同等であるが、分枝長は極めて短かく、着莢は主茎に偏し、草型は直立である。
  2. 胚軸は太さ中位で紫色、初生葉の形は長楕円、小葉は「十勝長葉」と同じく長葉、葉色は濃緑である。花色は赤紫、毛茸は白色、熟莢は淡褐色を呈する。
  3. 子実は球形で「十勝長葉」並みの小粒種。種皮は濃い黄色を呈し強い光沢がある。胎色は種皮と同じ黄色である。
  4. 熟期は晩生の早に属する。開花始は7月中旬で早い、成熟期は「北見白」より遅く、「十勝長葉」よりも約10日早い。
  5. 耐倒伏性は強く、既存の優良品種にまさっている。
  6. 子実収量は、全道的にみて「北見白」並みで、道央地方から道南地方にかけて「十勝長葉」をはるかに上廻り、多収性を具備している。
  7. 子実の粗蛋白含量、粗脂肪含量は「十勝長葉」とほぼ等しく、道内品種中では粗蛋白含量の高い品種であり、豆腐としての品質はまさる。
  8. マメシクイガの被害は、「十勝長葉」と同程度で少ない。菌核病にはかかりやすい。

**栽培適地と奨励態度** 「コガネジロ」は、「北見白」の栽培されている中・晩生種地帯(十勝管内、上川管内南部を含む)に適する。これらの地帯で「北見白」とともに栽培すべきである。

主茎型の極強茎種なので、肥沃地や密植栽培(地力によりその密度は異なる)に適する。ただし、多肥による増収性はあまり高くない。分枝長が短かく、着莢が主茎に偏するので、「北見白」に比し僅かに密植すれば本来の多収性を発揮する。

試験場所	開花始 月日	成熟期 月日	生育日数 日	成熟期における				10a当り		1,000 粒重 g	試験年次
				主茎長 cm	主茎節数 節	分枝数 本	着莢数 個	全重 kg	子実重 kg		
十勝支場	7.18	10.3	136	79.9	16.0	5.7	74.8	481	258	202	1958~1960
北海道農試	7.14	10.1	146	52.2	17.5	6.8	82.6	435	239	180	"
天北支場	7.26	10.14	146	50.8	-	4.4	57.9	380	184	195	"
北見支場	7.25	未	-	71.1	15.1	6.6	77.8	396	201	185	"
渡島支場	7.14	9.25	137	54.0	14.4	4.1	85.4	405	235	204	"
上川支場	7.22	10.4	127	82.4	-	5.5	-	636	301	231	1959~1960
原原種農場	7.16	9.29	137	55.8	-	3.0	70.8	-	263	186	1958~1960

#### (4) トカチシロ (十育96号)

来歴 「トカチシロ」は、1952年(昭27)北海道立農業試験場十勝支場において、高脂肪、多収、白目品種の育成を目標として、中国産品種「満倉金」を母とし、強茎、長葉、多収の「十勝長葉」を父として人工交配を行った。以来、F<sub>2</sub>まで集団選抜を行い、F<sub>4</sub>以降系統選抜で固定を図った。1957年(昭32)より生産力検定予備試験を行い、1958年(昭33)より「十育96号」の系統名で生産力検定試験、系統適応性検定試験、栽培特性検定試験に供試した。翌年から原種決定

試験に供試し、地方適否を検定した結果、消費者の需要動向が白目（臍色が黄～極淡褐色）品種へ変わりつつあることから、晩生の白目良質品種として認められ、1961年（昭36）優良品種に決定し、農林省に新品種「トカチシロ」（大豆農林24号）と命名、登録された。

- 特性概要 1.主莖長は「十勝長葉」より短く、「北見白」並み。分枝数は「十勝長葉」より多く「北見白」よりも若干多い。分枝は長く、裂けやすい。草型は開張し、逆三角形を示す。
- 2.葉形は円葉で、葉色は濃い。花色は赤紫、毛茸は白色、熟莢は淡褐色を呈する。
- 3.子実は球形で、大きさは「十勝長葉」より大きく「北見白」並みで小粒種に属する。種皮は黄白色、臍は種皮色と同色で典型的な白目品種の特性を具備している。肉眼判定による品質はよい。
- 4.熟期は晩生種に属する。開花期は「北見白」とほぼ等しいが、成熟期は「北見白」より遅く、「十勝長葉」よりやや早い。
- 5.耐倒伏性は「十勝長葉」並みで強い。
- 6.子実収量は、一般には「十勝長葉」並みで、「北見白」に比しやや劣る傾向があるが、道央地帯、道南地帯では両者に比し多収を示す。
- 7.子実の粗脂肪含量、粗蛋白含量は、ともに「十勝長葉」とほぼ等しく、豆腐としての品質もまさる。
- 8.マメシンクイガの被害は「北見白」より少ないが「十勝長葉」よりは多い。菌核病に対してはかかりやすい傾向を示す。

栽培適地と奨励態度 本品種は、「十勝長葉」が栽培されている中晩生種地帯、とくに十勝管内の内陸、道央地帯および道南の日本海側に適する。この地帯の「十勝長葉」にかえて栽培する。

肥沃地で一般に成績が良いが、菌核病にやや弱い傾向があるので、菌核病の多発地帯では疎植により被害の軽減をはかるなど、栽培法に留意すべきである。

早生種地帯では「十勝長葉」と同様、霜害の恐れがある。〔1966年（昭41）廃止〕

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における				10a当り		1,000粒重	試験年次
				主莖長	主莖節数	分枝数	着莢数	全重	子実重		
十勝支場	7.23	10.6	139	67.4	12.5	6.7	70.1	486	231	217	1958~1960
北海道農試	7.18	10.3	145	35.9	11.6	8.1	79.8	482	246	203	"
天北支場	7.29	(10.13)	(145)	48.6	-	4.6	57.2	438	182	196	"
北見支場	7.31	(10.11)	(141)	65.6	13.4	7.3	79.4	492	190	189	"
渡島支場	7.17	9.27	139	39.8	11.1	5.9	78.8	470	254	233	"
上川支場	7.31	10.6	131	80.1	-	6.1	-	754	285	261	1959~1960
原原種農場	7.18	10.4	142	51.4	-	2.8	70.0	-	284	219	"

( ) 内未成熟の年あり

#### (5) テンボクシロメ（天系48号）

来歴 「テンボクシロメ」は、1950年（昭25）北海道農業試験場で「紫花1号」を母とし、「奥原1号」を父として交配を行い、F<sub>1</sub>より北海道立農業試験場天北支場で選抜固定を図った

ものである。1961年（昭36）に優良品種に決定し、「テンボクシロメ」と命名された。

特性概要 1. 胚軸色は紫、小葉の形はやや小さく円葉である。花色は赤紫、毛茸は白色、熟莢は淡褐色を呈する。

2. 草型は無限伸育型で、莖長は「テンボクワセ」「大谷地2号」などよりやや高く、土地条件や気象条件が良好な場合は変化しやすい。

3. 開花期は「テンボクワセ」と大差ないが、成熟期は「テンボクワセ」より8～9日遅く、「大谷地2号」より6～8日早い早生種である。

4. 着莢は極めて良好で3粒莢の割合が多く、不稔歩合は「テンボクワセ」より高いが、「大谷地2号」より低い。

5. 種皮色は黄、臍色も黄で粒は球形を呈し、1,000粒重は170～180gの小粒種である。粒揃いはやや良好であるが、変化すると不揃いになる。

6. 収量は普通年では「テンボクワセ」「大谷地2号」より多収を示し、「北見白」と同程度であるが、冷害年には「大谷地2号」よりはるかに多収で、「テンボクワセ」「北見白」よりもまさる。

栽培適地と奨励態度 「テンボクシロメ」は耐冷性の強い早生種で、道東、道北の無霜期間が短く、冷害をうけやすい地帯の白目品種として他の品種と適宜配合して栽培する。〔1966年（昭41）廃止〕

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における				10a当り		1,000粒重	試験年次
				主莖長	主莖節数	分枝数	着莢数	全重	子実重		
天北支場	7.21	10.3	135	65.4	—	6.6	69.1	401	179	176	1956～1960
北見支場	7.27	9.30	127	76.1	—	10.4	92.5	422	196	167	1959～1960
十勝支場	7.18	9.23	126	90.9	15.4	7.3	75.6	414	212	173	〃
根室支場	8.1	達せず	—	57.7	—	7.2	62.7	418	228	166	1960
原原種農場	7.14	9.15	122	50.6	—	3.8	71.5	395	203	160	1959～1960
士別試験地	7.26	9.21	118	98.7	—	11.3	105.7	560	225	181	1960
北海道農試	—	9.14	—	53.0	—	9.0	79.0	354	196	160	1959～1960

#### (6) アサミドリ（大袖振一）

来歴 本品種は帯広市川西町南基松の農家、清水清氏が栽培していたものである。この種子は1957年（昭32）、北海道立農業試験場十勝支場が十勝管内より大豆の地方栽培品種1,200点を収集した際、「アサミドリ大豆」として取寄せられ、特性調査の結果優れていたもので、「大袖振一」の系統名を付し翌年から品種比較試験を行った。その結果、早熟、多収性が認められ、1962年（昭37）優良品種に決定し「アサミドリ」と命名された。

特性の概要 1. 主莖長は「吉岡大粒」、「早生緑」より長い。主莖節数は13節程度。分枝数は「吉岡大粒」程度。草型は開張する。

2. 葉形は円葉、花色は赤紫、毛茸は褐色、熟莢は褐色を呈する。

3. 子実は扁球形で、種皮色は黄地に淡緑色が腹部から鞍掛け状に覆い淡黄緑を呈するが、「吉岡大粒」より濃淡の差は著しくない。臍は黒色である。子実の大きさは、1,000粒重330g内外で「吉

岡大粒」より大きく、「早生緑」並みである。品質は「早生緑」並みで良好である。

4. 十勝における開花始は7月下旬で「吉岡大粒」と同程度であるが、成熟期は9月末で「吉岡大粒」より約7日早く、「早生緑」より1～2日遅い中生種である。
5. 生育は旺盛であるが、耐倒伏性は「吉岡大粒」、「早生緑」より劣り、やや倒伏しやすい。
6. マメシクイガの被害は「早生緑」並みで「吉岡大粒」より多い。
7. 収量性は高く、「吉岡大粒」より約25%、「早生緑」より15～20%程度多収である。
8. 子実の粗蛋白含量は「吉岡大粒」より3～4%低く「早生緑」並み、粗脂肪含量は「吉岡大粒」、「早生緑」より2～3%程度高い。

**栽培適地と奨励態度** 「アサミドリ」は十勝管内および冷涼地帯における子実用として、「吉岡大粒」および在来種の大袖振に比べ安全に栽培ができる。また、枝豆用としては全道各地の栽培に適する。

栽培法は普通大豆と同様であるが、生育が旺盛で主茎長が長く伸び、肥沃地では密植にしすぎると過繁茂になり、倒伏する恐れがあるので生育領域をやや拡げて栽培するとよい。

試験場所	開花期	成熟期	生育日数	成熟期における				10a当り		1,000粒重	試験年次
				主茎長	主茎節数	分枝数	着莢数	全重	子実数		
十勝支場	7.22	9.30	133	79.2	13.2	4.8	44.3	510	262	335	1958～1961
北見支場	7.22	9.28	125	62.0	13.6	8.5	60.7	539	254	350	1961
上川支場	7.19	9.21	117	90.9	14.6	8.5	45.0	622	261	364	"
原原種農場	7.14	9.21	129	40.0	—	4.6	35.0	373	191	308	"

### (7) ワセコガネ (十育97号)

**来歴** 「ワセコガネ」は、1952年(昭27)北海道立農業試験場十勝支場において、高脂肪、多収、白目品種の育成を目標として、中国産品種「紫花4号」を母とし、強茎、長葉、多収の「十勝長葉」を父として人工交配を行い、1953年(昭28)にこのF<sub>1</sub>を母とし「十勝長葉」を父として戻し交配を行った。以来F<sub>3</sub>まで集団選抜を行い、F<sub>4</sub>以降強茎、中熟、白目良質、多収に育種目標を変更し、系統選抜で固定を図った。1959年(昭和34)F<sub>5</sub>より生産力検定予備試験を行い、1961年(昭36)より「十育97号」の系統名を付して、生産力検定試験および各種の栽培試験に供すると同時に、関係機関に配布して地方適否試験を行った。その結果、機械化栽培適応性の高いことが認められ、1964年(昭和39)優良品種に決定し、農林省に新品種「ワセコガネ」(大豆農林33号)と命名、登録された。

- 特性概要**
1. 主茎長は「十勝長葉」より長く「コガネシロ」程度であるが、半無限伸育型を示す。分枝数はやや少く、茎も細い。着莢は主茎に偏し、草型は直立する。
  2. 葉形は「コガネシロ」と同様の長葉で、大きさは中程度であるが、頂部にゆくほど小さくなる。花色は赤紫、毛茸は白色、熟莢は淡褐色を呈する。
  3. 子実は球形で、小粒種に属し、「コガネシロ」よりやや小さく、「鈴成」よりやや大きい。種皮は黄色でやや光沢があり、胎色は種皮と同じく黄色である。外見的品質は良好である。
  4. 開花始は7月中旬で、成熟期は「鈴成」より2～3日遅れるが、「コガネシロ」より1週間程

度早い早熟種である。

5. 耐倒伏性は「コガネジロ」並で強い。

6. 圃場では裂莢がみられず、裂莢に対する抵抗性が強い。

7. 子実収量は、「鈴成」と同程度で「コガネジロ」よりやや少ないが、年次間変動は小さく「鈴成」、「コガネジロ」より安定性が高い。密植もしくは条播栽培による増収効果が高い。

8. マメシンクイガの被害は、「コガネジロ」並で少ない。菌核病に対して白毛品種は褐毛品種より弱い、「ワセコガネ」は褐毛品種並の被害で「コガネジロ」より強い。

栽培適地と奨励態度 「ワセコガネ」は、十勝の山麓および沿海、網走のオホーツク沿海とそれに類似の早生地帯に適し、「鈴成」におきかえて栽培する。

普通栽培では「鈴成」と同程度の収量を示すが、密植条播にすると増収する傾向が大きいので、従来の品種より密播するよう注意すべきである。

試験場所	開花期	成熟期	生育日数	成熟期における				10a 当り		1,000粒重	試験年次
				主茎長	主茎節数	分枝数	着莢数	全重	子実重		
十勝支場	7.17	9.28	131	92	16.5	5.7	74.0	482	236	214	1961~1963
北見支場	7.25	10.2	132	70	14.4	4.3	85.6	396	180	185	1959~1960
天北支場	7.19	10.8	140	48	—	2.9	52.0	336	141	204	"
北海道農試	7.15	9.17	129	46	15.1	4.3	67.1	355	194	179	"

### (8) オシマシロメ (札育12号)

来歴 「オシマシロメ」は北海道農業試験場において、高脂肪多収品種育成のため、1950年(昭25)に「十勝長葉」を母とし、「黄宝珠」を父として交配を行い、子実比重による選抜効果の検定に用いた材料の中から選抜固定をはかったものである。1964年(昭39)優良品種に決定し、農林省に新品種「オシマシロメ」(大豆農林34号)と命名、登録された。

特性概要 1. 胚軸色は緑、小葉の形は円、花色および毛茸色は白で、熟莢は淡褐色である。

2. 草型は「黄宝珠」に類似した無限伸育型である。茎長は「ナガハジロ」より高く、分枝数は「ナガハジロ」より少ないが、分枝長は一般に長く、莢着きは密である。

3. 開花期は「ナガハジロ」に比べて3日程度早い、無限伸育型であるため成熟期は「ナガハジロ」より数日遅い極晩生種である。

4. 耐倒伏性は「ナガハジロ」より弱い。

5. マメシンクイガの被害は「北見白」「大谷地2号」より少ない。

試験場所	開花期	成熟期	生育日数	成熟期における				10a 当り		1,000粒重	試験年次
				主茎長	主茎節数	分枝数	着莢数	全重	子実重		
北海道農試	7.19	10.10	147	79.7	18.7	5.3	69.2	684	321	277	1961~1963
渡島支場	7.26	10.9	—	87.2	16.0	6.5	—	657	342	290	"
原原種農場	7.15	10.12	—	79.4	18.1	5.7	—	532	214	284	"

6. 粒大は「ナガハジロ」より大きい中粒種に属し、種皮色、臍色、はともに黄で、粒形は球である。
7. 収量は、道央部以南においては「ナガハジロ」「北見白」などに比べて多収でかつ安定している。
8. 子実の成分は「ナガハジロ」に比較して、脂肪含量はやや少ないが、蛋白含量は同程度かやや多い。

栽培適地と奨励態度 「オシマシロメ」は道央以南（石狩南部，後志，渡島，桧山）において、「ナガハジロ」と共に多収，良質種として栽培を奨励する。〔1975年（昭50）廃止〕

#### (9) ホウライ（十育109号）

来歴 「ホウライ」は、1955年（昭30）北海道立農業試験場十勝支場において、タイズシストセンチュウ抵抗性品種育成を目標として、東北産の極晩生で抵抗性品種「下田不知1号」を母とし、「十育71号」（「十勝長葉」×「赤花在来」）を父として人工交配を行い、以米線虫生息圃場および普通圃場に栽植し、抵抗性を検定するとともに選抜固定を図った。

1960年（昭35）、F<sub>2</sub>代より生産力検定予備試験を行い、1962年（昭37）F<sub>7</sub>代より「十育109号」の系統名で生産力検定試験に供試すると同時に、特性検定試験，系統適応性検定試験および奨励品種決定現地試験を実施した。さらに翌年より十勝管内の線虫発生地で現地試験もあわせて行ってきたもので、1965年（昭40）優良品種に決定し、農林省に新品種「ホウライ」（大豆農林37号）と命名，登録された。

特性概要 1. 主茎長は「北見白」より長く、「コガネジロ」よりもやや長い。主茎節数は15節程度，分枝は長く数も多い。草型は開張する。

2. 葉形は円葉，花色は赤紫，毛茸は白色，熟莢色は淡褐色を呈する。

3. 子実はやや扁球形で，種皮色は黄色，臍色は黄～極淡褐色，子実の大きさは1,000粒重280g内外で中粒種に属し，外観的品質は良好。

4. 晩生種に属するが，開花および成熟期は「トカチシロ」よりもやや早い。

5. 耐倒伏性はやや弱く，繁茂する条件下では倒伏するが，線虫圃場や普通程度の肥沃地に栽培する場合は倒伏しないか，しても軽微である。

6. 子実収量は，線虫圃場に栽培した場合，一般の品種が著しい減収を示すのに対し，「ホウライ」の減収は極めて少ない。普通圃場に栽培した場合も非抵抗性の奨励品種に劣らない高い収量をあげる。

7. 子実の粗蛋白含量は，44%程度で高く，粗脂肪含量は低い。

非抵抗性品種は，線虫圃場で粗蛋白含量が減少し，粗脂肪含量が増加するが，本品種では変化が少ない。

8. タイズシストセンチュウに対しては，「ネマシラズ」，「下田不知1号」と同程度の抵抗性を示し，全生育期間中ほとんど被害症状がない。非抵抗性品種の根には，多くのシストが着生し，根粒は極めて少ない。本品種では，シストは極めて少なく，根粒は多い。

9. キタネコブセンチュウに対する抵抗性はない。マメシンクイガの被害は多い。菌核病にはかかりやすい。

栽培適地と奨励態度 「ホウライ」は，タイズシストセンチュウの被害が認められる中晩生種地帯を対象として，全道に適する。



普通圃場で栽培する場合は、「北見白」、「コガネシロ」の栽培に準じて行えばよい。ただし、耐倒伏性が弱いので注意する必要がある。〔1978年（昭53）廃止〕

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における				10a 当り		1,000粒重	試験年次
				主茎長	主茎節数	分枝数	着莢数	全 重	子実重		
十勝農試 線虫圃	7.25	10.9	141	73.4	14.4	6.0	40.9	288	115	206	1963~1964
十勝農試 普通圃	7.20	10.12	147	90.7	15.2	8.2	67.6	552	241	244	1962~1964
北見農試	8.4	10.14	141	83.1	14.6	9.2	63.2	459	165	212	"
天塩支場	7.27	未	-	57.1	14.3	5.6	34.6	289	103	202	"
上川農試	7.27	(10.13)	(143)	90.4	-	6.7	84.9	557	205	258	"
原原種農場	7.13	10.3	142	68.1	14.9	8.8	79.6	395	173	267	"
北海道農試	7.22	10.3	140	47.5	14.9	9.1	71.1	342	175	227	"
道南農試	7.18	9.28	142	67.7	14.2	7.9	88.1	486	251	259	"

( ) 内は未成熟を除く

#### (10) トヨスズ (十育118号)

来歴 「トヨスズ」は、1955年（昭30）、北海道立農業試験場十勝支場において、ダイズシストセンチュウ抵抗性品種育成を目標として、東北産の極晩生で抵抗性品種「下田不知1号」を母とし、樺太産極早生品種「トサ第7910号」（十勝支場種苗台帳番号）を父として人工交配を行い、以来線虫生息圃場および普通圃場に栽植し、抵抗性を検定するとともに選抜固定を図った。

1962年（昭37）、F<sub>7</sub>より生産力検定予備試験を行い、1964年（昭39）F<sub>9</sub>より「十育118号」の系統名で生産力検定試験を行うと同時に、特性検定試験、系統適応性検定試験および奨励品種決定現地試験を実施した。さらに同年より十勝管内の線虫発生地で現地試験もあわせて行ってきたもので、1966年（昭41）優良品種に決定し、農林省に新品種「トヨスズ」（大豆農林43号）と命名、登録された。

特性概要 1. 主茎長は50cm内外で「ホウライ」より約30cm、「北見白」より約20cmも短い短茎種、主茎節数は10節程度、分枝数は比較的少ない。草型は直立である。

2. 初期生育は旺盛、葉は円葉で濃緑色を呈するが開花後はとくに濃くなる。花色は赤紫、毛茸は白色、熟莢は淡褐色を呈する。

3. 子実はやや扁球形で、種皮色は黄白、臍色は黄~極淡褐色。子実の大きさは1,000粒重320g内外で大粒種の小に属し、外観的品質は良好。

4. 中生種に属する。開花始は「ホウライ」と変わらないが、個体の開花は短期間に終り莢の肥大も早い。登熟期間はやや長く、成熟期は「ホウライ」より3日程度早い、「北見白」より2~3日程度遅い。

5. 耐倒伏性は強く「北見白」並みである。

6. 子実収量は、普通圃場では「北見白」、「ホウライ」に劣るが、線虫圃場では「北見白」より、また天候の不順な年には「ホウライ」より減収率が低く安定している。

7. 子実成分は、「北見白」より粗蛋白含量が高く、粗脂肪含量は低い。非抵抗性品種は、線虫圃場で粗蛋白含量が減少し、粗脂肪含量が増加するが、「トヨスズ」では変化が少ない。

8. ダイズシストセンチュウに対しては、「ネマシラス」、「ハウライ」と同程度の抵抗性を示し、全生育期間中ほとんど被害症状がない。
9. キタネコブセンチュウに対する抵抗性はない。マメシクイガの被害は多い。菌核病には「北見白」よりかかりやすい。

**栽培適地と奨励態度** 「トヨスズ」は、十勝管内、網走管内のダイズシストセンチュウの被害が認められる地域に適する。とくに中央部で大豆の草出来が旺盛で倒伏のみられる地帯および山麓地帯に適する。

「トヨスズ」は、子実が大きいため、発芽は遅れ、発芽率が低下し欠株が多くなる場合もあるので、薬剤で必ず種子粉衣をすること。

普通圃場での栽培は「北見白」に準じて行えばよい。ただし、初期生育は旺盛であるが栄養生長が開花揃頃までで停止するので、栽植密度はあまり広げないこと。

線虫発生地で栽培する場合は、肥料をやや多めに施すか、または栽植密度をやや狭くすることが望ましい。

試験場所	開花期	成熟期	生育日数	成熟期における				10a 当り		1,000粒重	試験年次
				主茎長	主茎節数	分枝数	着莢数	全重	子実重		
十勝農試 線虫圃	7.26	10.8	140	51.2	10.0	4.4	41.9	335	170	282	1964~1965
十勝農試 普通圃	7.23	10.9	144	54.1	9.7	4.1	54.3	507	240	320	1962~1965
北見農試	8.4	10.7	139	45.2	10.8	3.5	48.3	346	148	238	1964~1965
上川農試	7.27	10.13	143	56.0	10.5	4.2	64.3	549	237	279	"
原原種農場	7.20	10.8	148	38.4	9.8	2.5	50.9	294	111	296	"
北海道農試	7.25	10.5	139	34.9	10.5	2.6	49.3	293	150	237	"
道南農試	7.14	9.23	136	42.6	10.4	2.9	60.3	381	203	278	"

## (II) キタムスメ (十育122号)

来歴 「キタムスメ」は、1958年(昭33)北海道立農業試験場十勝支場において、「十育87号」(カリカチ)を母とし、「北見白」を父として人工交配を行い、以来選抜固定を図ったものである。1963年(昭38)、F<sub>5</sub>より生産力検定予備試験に供試した。

1964年(昭39)、F<sub>6</sub>代より「十育122号」の系統名で生産力検定試験を行うと同時に、道内関係機関で奨励品種決定基本調査を行い、同現地調査を翌年より実施した。1965年(昭40)から栽培特性検定試験に供試してきた。さらに、耐冷性現地選抜圃、ファイトロンで耐冷性を検定してきたもので、1968年(昭43)優良品種に決定し、農林省に新品種「キタムスメ」(だいで農林49号)と命名、登録された。

**特性概要** 1. 主茎長は「北見白」よりやや長く「カリカチ」より短い。分枝数は「北見白」よりやや少ない。草型はやや開張する。

2. 初期生育は旺盛である。葉形は円葉、花色は赤紫、毛茸は褐色、熟莢色は褐色を呈する。

3. 子実は球形で、種皮色は黄白、臍は暗褐色である。子実の大きさは「北見白」、「カリカチ」および「大谷地2号」よりも大きく、中粒種に属する。品質は良好である。

4. 中生種に属し、開花期は「北見白」よりやや早く、成熟期は同じか1～2日程度早い。
5. 耐倒伏性は「北見白」よりやや弱い、「カリカチ」より強く、普通程度の肥沃地に栽培する場合は倒伏しないか、しても軽微である。
6. マメシクイガの被害は「北見白」よりやや多く、「カリカチ」並である。ダイズシストセンチュウに対しては一般品種同様に抵抗性はない。菌核病の被害は「北見白」、「カリカチ」並で一般に少ない。
7. 収量は「北見白」および「カリカチ」より多収であり、とくに、冷害年においても安定した収量を示す。
8. 子実の粗蛋白質含量は「北見白」よりやや低く、「カリカチ」並である。粗脂肪含量は「北見白」および「カリカチ」よりやや高い。

栽培適地と奨励態度 「キタムスメ」は十勝、上川管内および網走管内中央部に適し、この地帯の「北見白」と「カリカチ」の大部分におきかえる。

発芽率がやや低下することがあるので播種するときに殺虫、殺菌剤の種子粉衣を励行すること、及びマメシクイガの被害が比較的大きいので防除を行うことが必要である。

試験場所	開花期		生育日数	成熟期における				10a当り		1,000粒重	試験年次
	月日	月日		主茎長	主茎節数	分枝数	着莢数	全重	子実重		
十勝農試	7.27	10.9	144	79.0	12.4	5.0	64.2	529	260	28.9	1964～1967
北見農試	8.4	10.14	146	63.0	12.5	5.8	64.8	516	207	25.7	"
上川農試	7.30	(10.12)	(140)	88.6	11.6	5.0	72.2	680	282	28.9	"
原原種農場	7.21	10.2	136	54.2	10.2	4.9	63.5	449	211	29.3	"
中央農試	7.28	10.14	147	70.4	12.8	4.6	75.9	583	261	31.4	1966～1967
北海道農試	7.26	10.3	137	48.9	12.5	3.3	62.9	323	169	24.4	1964～1965
道南農試	7.16	9.22	135	56.5	11.7	4.8	67.2	439	224	26.9	1964～1965 1967

( ) 内は未成熟を除く

## (12) ユウヅル (中育3号)

来歴 「ユウヅル」は北海道立中央農業試験場が、1966年(昭41)に道央、道南、東北(青森、岩手)の各地より収集した大豆在来種のうち、北海道食糧事務所苫小牧支所が見本品として所有していた新冠町産の「鶴の子」より純系分離法によって育成したもので、1971年(昭46)優良品種に決定し、農林省に新品種「ユウヅル」(だいで農林55号)と命名、登録された。

- 特性概要
1. 胚軸色は緑、小葉の形は円、花色は白、毛茸色も白で、熟莢は褐色を呈する。
  2. 草型は有限伸育型で、「白鶴の子」に比べ茎長は低い、分枝数多く着莢数も多い。
  3. 開花期は「白鶴の子」に比べ数日早く、成熟期は「白鶴の子」より7日前後早く、「早生鶴の子」よりやや早い。
  4. 耐倒伏性は「白鶴の子」よりまさるが、「コガネシロ」や「キタムスメ」などより弱い。
  5. 子実は「白鶴の子」と同じやや扁球形で種皮色は黄白、脐色は濃黄である。粒大は「白鶴の子」なみの鶴の子銘柄に属する極大粒種で、種皮の亀裂は「白鶴の子」に比べやや少ない。
  6. 収量は「白鶴の子」より20%程度多収で、「早生鶴の子」にもまさるが、「オシマシロメ」よ

りやや劣る。

7. マメシクイガの被害は「白鶴の子」よりやや少なく、「早生鶴の子」よりやや多い。ダイズわい化病に対する抵抗性はないが、「白鶴の子」に比べると発病率は少ない。

栽培適地と奨励態度 「ユウヅル」は、石狩、空知の中南部、後志南西部、胆振、日高、渡島、桧山地方に適し、これらの地帯の「白鶴の子」「早生鶴の子」におきかえる。

試験場所	開花期	成熟期	生育日数	成熟期における				10a当り		1,000粒重	試験年次
				主茎長	主茎節数	分枝数	着莢数	全重	子実重		
中央農試	8. 1	10. 15	148	67.4	14.5	4.9	52.7	577	252	413	1968~1970
道南農試	7.30	10. 7	147	76.0	14.0	3.0	37.8	632	277	423	1969~1970
原原種農場	7.31	10.13	150	68.9	14.2	3.7	35.6	528	207	419	"

### (13) ヒメユタカ (十育161号)

来歴 「ヒメユタカ」は、1964年(昭39)北海道立十勝農業試験場において、良質多収品種の育成を目的として、白目、大粒の「十育129号」(「白鶴の子」×「カリカチ」)を母とし、耐冷性强、多収の「カリカチ」を父として人工交配を行い、以来選抜固定を図ったものである。1970年(昭45)F<sub>2</sub>より生産力検定予備試験に供試した。

1971年(昭46)、F<sub>2</sub>より「十育161号」の系統名で生産力検定試験を行うと同時に、道内関係機関で奨励品種決定基本調査を行い、翌年より同現地調査を実施した。さらに1971年(昭46)からマメシクイガ耐虫性特性検定試験、1973年(昭48)から栽培特性検定試験、低温処理試験に供試してきたもので、1977年(昭52)優良品種に決定し、農林省に新品種「ヒメユタカ」(だいで農林61号)と命名、登録された。

特性概要 1. 主茎長は「トヨスズ」より約15cm長く、「キタムスメ」程度。主茎節数は12節程度。分枝数は「トヨスズ」よりやや多い。草型はやや開張する。

2. 初期生育は旺盛である。葉形は円葉、花色は赤紫、毛茸は白色、熟英色は淡褐色を呈する。

3. 子実は球形で、種皮色は黄白、臍色は黄(年次により極淡褐色を呈することがある)、1,000粒重は350g内外で大粒種の中に属し「トヨスズ」よりも大きい。外観的品質は豊満で良好。

4. 開花期は「トヨスズ」よりやや遅く、「キタムスメ」並である。成熟期は「キタムスメ」より2~3日遅く、「トヨスズ」より4~5日早い中生種。登熟、枯上がりは良好である。

5. 耐倒伏性は「トヨスズ」より弱く、「キタムスメ」程度。多肥または密植栽培では倒伏の恐れもある。

6. 裂莢性は従来品種と同様裂莢しやすい。

7. 開花時期の低温に対しては「トヨスズ」より安定している。

8. ダイズシストセンチュウに対する抵抗性はない。

9. マメシクイガの被害は「キタムスメ」並で多い。菌核病の被害は「トヨスズ」より一般に少ない。

10. 収量性は「トヨスズ」より早熟のため安定性が高く多収であり、ほぼ「キタムスメ」並である。

11. 子実の粗蛋白、粗脂肪含量は、「トヨスズ」と「キタムスメ」の間である。

栽培適地と奨励態度 「ヒメユタカ」は、十勝管内、網走管内、上川管内中南部およびこれらに類似の地帯に適する。十勝中央部は豆作率が高く、ダイズシストセンチュウの密度が高いため適さない。上記の地帯で白目良質品種を望むところでは、「北見白」、「キタムスメ」の1部におきかえる。センチュウの被害が認められない地帯では「トヨスズ」を全面的におきかえる。

ダイズシストセンチュウの被害の恐れのある圃場での栽培はさける。

子実が大きいため、発芽が遅れ、発芽率がやや低下するので、必ず種子粉衣をすること。マメシクイガの適期防除を行うこと。

肥沃地では倒伏の恐れがあるので、極端な密植はさけた方がよい。

試験場所	開花期	成熟期	生育日数	成熟期における				10a 当り		1,000粒重	試験年次
				主茎長	主茎節数	分枝数	着莢数	全重	子実重		
十勝農試	7.25	10.4	139	66.0	12.1	5.5	52.3	567	285	358	1970~1975
北見農試	7.27	9.30	132	69.5	11.9	4.7	62.3	613	295	353	1972~1975
上川農試	7.22	10.1	134	70.3	12.0	6.3	77.1	651	312	358	1971~1975
原原種農場	7.20	9.23	129	50.9	10.5	4.6	53.4	526	292	341	"
中央農試	7.22	9.28	134	52.7	11.4	3.8	55.4	502	252	346	"

#### (14) キタコマチ (十育167号)

来歴 「キタコマチ」は、1965年(昭40)北海道立十勝農業試験場で白目、中粒、良質、多収品種の育成を目標として、白目、大粒の「十育129号」(「白鶴の子」×「カリカチ」)を母とし、白目、良質、強稈の「十育118号」(トヨスズ)を父として人工交配を行い、以来選抜固定を図ったものである。

1970年(昭45)F<sub>2</sub>より生産力検定予備試験に供試した。1972年(昭47)より「十育167号」の系統名で生産力検定試験を行うと同時に、道内関係機関で奨励品種決定基本調査を行い、翌年より同現地調査を実施した。さらに1972年(昭47)よりマメシクイガ耐虫性特性検定試験、1973年(昭48)より栽培特性検定試験、低温処理試験に供試した。1978年(昭53)優良品種に決定し、農林水産省に新品種「キタコマチ」(だいで農林64号)と命名、登録された。

特性概要 1. 主茎長は「ヒメユタカ」より短く、「トヨスズ」並かやや長い。主茎節数、分枝数とも「トヨスズ」並で、草型は「トヨスズ」によく似ている。

2. 初期生育は旺盛であるが、葉色は「トヨスズ」よりやや淡い。葉形は円葉、花色は赤紫、毛茸は白色、熟莢色は淡褐色を呈する。

3. 子実はやや扁球形で、種皮色は「トヨスズ」と同様黄白である。脐色は黄(年次により極淡褐色を呈することがある)、1,000粒重は300g内外で「トヨスズ」よりもやや小さい。

4. 開花期は「トヨスズ」と同程度で「ヒメユタカ」より2~3日早い。成熟期は「トヨスズ」より10~14日程度早く、「ヒメユタカ」より7~8日早い。早生種の「イスズ」並の成熟期で枯上りも良好である。

5. 耐倒伏性は「トヨスズ」並で強い。裂莢はしやすい。

6. 耐冷性は「トヨスズ」並であるが、熟期が早いので安定性は高い。
7. ダイズシストセンチュウに対する抵抗性はない。
8. 収量性は「トヨスズ」より7%前後劣るが、熟期が早いので安定している。しかし、年次により「トヨスズ」同様、臍部の着色、種皮の亀裂がみられる場合がある。
9. 子実の粗蛋白含量は、「トヨスズ」と同程度でやや高く、粗脂肪含量はやや低い。

**栽培適地と奨励態度** 本品種は、上川管内および収穫、乾燥時の天候がこれに類似する地帯に適する。これらの地帯の「トヨスズ」、「北見白」、「キタムスメ」の1部におきかえ、さらに早生品種を必要とする地帯に普及する。

草型、子実の形は「トヨスズ」に類似しているが、ダイズシストセンチュウに対しては抵抗性はないので、被害の恐れのある圃場での栽培はさけること。

だいずわい化病、マメシクイガの防除は従来の品種同様に行うこと。

その他の肥培管理は、「トヨスズ」、「北見白」、「キタムスメ」など一般品種の栽培に準じて行えばよい。

試験場所	開花期	成熟期	生育日数	成熟期における				10a 当り		1,000粒重	試験年次
				主茎長	主茎節数	分枝数	着莢数	全重	子実重		
十勝農試	7.22	9.28	133	48.2	11.1	4.7	51.6	479	255	299	1972~1977
北見農試	7.23	9.26	128	52.0	10.9	4.2	57.7	494	238	268	1972~1976
上川農試	7.17	9.20	123	54.0	10.4	5.5	67.0	579	297	308	1972~1977
原原種農場	7.17	9.19	125	40.0	9.7	3.9	46.7	437	252	304	1972~1976
中央農試	7.19	9.28	134	41.0	10.5	4.5	57.9	421	219	295	1973~1974

## 9. 小豆

### (1) 光小豆 (十育7号)

**来歴** 「光小豆」は、1955年(昭30)に北海道立農業試験場十勝支場において「茶殻早生」を母とし、「早生大粒1号」を父として交配し、以降選抜固定をはかって来たものである。1941年(昭36)より「十育7号」の系統名で生産力検定試験に供試するとともに、地方適否を確めた結果、1964年(昭39)優良品種に決定し、「光小豆」と命名された。

- 特性概要**
1. 開花始、成熟期とも「宝小豆」なみか、1~2日おそい中生種である。
  2. 草丈はやや高く、開花期前後、気象条件がよければ蔓化することもある。
  3. 熟莢色は淡褐色で、莢は長く、太さ中位でやや湾曲する。
  4. 子実は小粒でやや烏帽子型を示し、種皮色はやや淡赤色で光沢がある。
  5. 子実収量は「宝小豆」より多収で、やや疎植(10a当り6,000株程度)で多収の傾向を示す。

**栽培適地および奨励態度** 全道一円に適するが、とくに冷涼な地帯はさける。

この品種は開花期前後の気象条件によっては蔓化の傾向を示すことがあるので地力の高い圃場においては密植栽培はさけるべきである。(1975年(昭50)廃止)